

令和6年度 第1回 大和郡山市総合教育会議

①開催日時 令和6年10月17日（木） 午後3時～午後4時

②開催場所 大和郡山市役所 大会議室

③出席者 上田清 市長、谷垣康 教育長、岩田淳尚 教育長職務代理者、
牧浦温代 教育委員、菊岡洋之 教育委員、大原末子 教育委員、
以上6名

事務12名

④傍聴人数 0名

⑤次第

1. 開 会
2. 市長挨拶
3. 出席者紹介
4. 大和郡山市の不登校対策について
5. その他
6. 閉 会

⑥議事

○事務局

皆様こんにちは。それでは時間になりましたので、これより令和6年度第1回大和郡山市総合教育会議を開催させていただきます。それでは、最初に上田市長から開会のご挨拶をいただきます。よろしくお願いします。

○上田市長

市長挨拶 ー略ー

○事務局

では続きまして、今年度第1回目の総合教育会議でございますので、本日の出席者をご紹介します。

委員紹介 ー略ー

本日の配付資料の方を確認させていただきます。

配布資料確認 ー略ー

それでは早速、会議に入らせていただきます。次第に沿って進めさせていただきます。
それでは次第 4 の大和郡山市の不登校対策についてでございます。澁谷次長より報告をさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

○澁谷次長

横向きの資料 5 枚について順番に説明させていただきます。

令和 6 年度大和郡山市教育行政方針の中で、不登校対策総合プログラムを充実させて参りますという文言があります。学科指導教室「ASU」が郡山北小学校・郡山中学校分教室として、新しいスタートを切っています。これまではそのプログラムとして、スクールカウンセラーや学習指導教室「ASU」について説明をしていました。しかし、大切なのは、各学校で、不登校児童生徒を出さない取り組みについてです。今年度、校内教育支援センターも開設されました。そこで改めて不登校対策総合プログラムを作成することが必要になりました。そこで今回はその概要案と現状をお伝えしていこうと思います。

資料の 2 枚目をご覧ください。不登校児童生徒数の推移です。左側は 1,000 人当たりの不登校児童数、生徒数を示しています。令和 5 年度の奈良県と全国の数値がこの冬に出る予定です。平成 30 年と令和 4 年を比べますと、小学校は約 4 倍、1,000 人当たり 4.3 から 15.9 になりました。中学校は約 1.5 倍、40 人から 76 人になっています。そして本市の不登校児童生徒数は、右の表にありますけれども、平成 30 年度 102 人から昨年度 201 人となっております。

では資料の 3 枚目をご覧ください。これは、令和 4 年の 12 月に文部科学省から出された生徒指導提要から不登校についての部分を抜粋したものです。平成 28 年、義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律が成立し、基本指針が策定されました。これまで、不登校児童生徒に問題があるという決めつけを払拭し、教職員、保護者、地域の人々が、不登校児童生徒に寄り添い、支援する周りの大人との信頼関係を構築していく過程が、社会自立に繋がるという視点を重視したものとなりました。これは 20 年の歴史をもつ本市の「ASU」が大切にしてきた理念と繋がると改めて感じました。

資料の 4 枚目をご覧ください。これは文部科学省の委託を受けて、不登校のきっかけについて、教師、児童生徒保護者の回答を比較したものです。3 者で差があった項目は赤いライン。概ね一致している項目は青ラインです。赤ラインの方で 3 者に差があった項目は、体調不良の訴え、不安抑うつ訴え、居眠り、朝起きられない、夜眠れない。また、上の方にあ

りますが、いじめ被害。教職員への反抗・反発教職員とのトラブル、叱責などと続いています。そして3者が概ね一致した項目としては青ラインですが、学業不振、また宿題ができていないなどとなっています。

そこで一番最初の資料1にお戻りください。不登校対策総合プログラムの概要なんですけれども、まず、左側、児童生徒が不登校にならないための取り組みとして、学校が子供たちにとって楽しい場所にするのをまず書くようにしています。学校がどのような場所であるべきかが今問われています。学ぶことが楽しいと感じられる授業づくり、そのためにはまず教員の授業改善です。学習の基礎基本が身についていない児童生徒への早期対応、そのために学習支援や、今、通級指導教室に通う生徒も増えています。みんなで活動することが楽しいと感じる集団づくり、総合的な学習の時間や学校行事でそれぞれいろいろやっています。一人一人の居場所がある仲間づくり、自分も他人も大切にする学級づくりいじめを許さない学校づくり。つまりこれは友人にも先生にも助けてが言える学校だと思います。そして、子供が生き生きと活動できる学校づくり、いろんな校則やルールがありますが、そういうものでも不必要なものに縛られない学校生活、そしてまた未然防止、初期対応の校内体制を作ることも大切です。

しかし残念ながら、不登校になってしまった場合は、次の段階に進まなくてはなりません。教室には入れないけれども、学校に来れる場合と、学校にも来れない場合に分かれます。学校に来れる場合は、これまでからも登校時間をずらしたり、別室で対応したりしていました。そして今年は、校内教育支援センターを郡山南中学校と筒井小学校モデル校として開設しました。また、学校に来れない場合は、分教室「ASU」があります。まず、分教室「ASU」では適応指導教室の役割を果たしているあゆみルームへ通い、その後、学籍を移して「ASU」への正式入室となります。また、ASU カウンセリングステーションでは、市内のすべての児童生徒や保護者を対象にカウンセラーが相談に乗ってくれます。

最後の写真の資料をご覧ください。現在の分庁舎と校内教育支援センターの様子です。この会議の準備をしながら、いろいろ考えさせられました。市内に「ASU」があるということで不登校児童生徒が出ると、あゆみルームや「ASU」にすぐ繋いでいたのかもしれませんが。まず学校がどうあるべきか、学校の役割について考えさせられています。ここに「ASU」が、平成30年に当時の学科指導教室「ASU」が作成した、「初めて不登校の子供を担任する先生のための支援ガイドブック」という冊子があります。各校に配布されているのですが、改めて読み直しました。その編集後記にこのような文が書かれています。『不登校という経験を、自分の中で意味づけ、自分の存在価値や生き方を獲得していった子供たちがいる一方で、「ASU」にも通えなかった子、「ASU」卒業後の進路で再び挫折してしまった子もいます。まだまだ「ASU」も発展途上にあります。多様化する不登校への対応や、発達障害を抱える子供の支援など、たくさん課題があります』と書かれていました。21年目を迎えた「ASU」とともに、児童生徒が不登校にならないための取り組みを今後も進めていかななくてはならないと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。以上です。

○事務局

ご説明ありがとうございました。それでは委員の皆様、ご意見があれば、仰っていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

○岩田委員

不登校児童生徒数がかなり伸びており一般的にもコロナ禍で増えたということが言われていますけども、郡山市ももう全く同じで、コロナ禍を経て、4倍、1.5倍とかなりひどいですね。この間ラジオを朝聞いてたらね、ちょうど名古屋大学の教育の内田先生っていう方が不登校、ちょうどその不登校の理由は何だというので放送があって、いじめを一般的には多くとり上げられてるけれども、いじめはきっかけになるけど、それだけっていう単純なものじゃないという話があって、私も教育現場でおりましたので、昔からいじめだけの単純な理由じゃないってのは分かってることなんですけども、なかなかその本当に理由っていうのは、本人も分からない、親も教師も分からないというような中で模索があるんですけども、郡山市は分教室という形で「ASU」が格上げされて、あゆみルームを経てですけども、「ASU」へ来られる方へカウンセリングを行う中で不登校の理由としてはっきり分かってるものがあるのであれば、ご存じの範囲で教えていただければと思います。

○澁谷次長

理由について、私はきちんと調べたことはないんですけども200人いる中で「ASU」に通えるのは多分20人ぐらいだと思うんですが、現在8人が通っております。「ASU」に通えるっていうことは、自分の中でいろいろあったかもしれないけれども、家を出てやはり勉強したいと思うお子さんが「ASU」には通えています。「ASU」に通う中で、「ASU」は学習よりも体験の時間がとって多いです。友達と一緒にいろんな活動する、そして人間関係がうまくいって、そうすると高校に行っても辞めないですし、本当に精神的にも安定し、成長して卒業していったのかなと思うのですが、原因についてどうなのと言われると、そこは把握しておりません。

○岩田委員

要するに「ASU」で教員されてる方は、何が原因かっていうのは、カウンセリングしながら、印象というか、理由を「ASU」に来られるから、その辺は掴んでおられるんですかね。

○澁谷次長

入るにあたってカウンセラーの先生が話を聞いているので、それは掴んでいると思います。

○岩田委員

その辺をどのような原因かというのを掴んでいく中で、また対策も考えられるのかなと思います。「ASU」に入って、卒業が「ASU」じゃなくて元の小中へ戻るっていう場合もあるんですか。

○澁谷次長

今はそれを求めていますので、学科指導教室になった時点で、もちろん戻る子もたまに

はいるかもしれませんが、基本的には「ASU」のまま卒業するという形になっています。「ASU」で成績もつけられて、入試もできます。

○岩田委員

だから戻ることを目標にしてないと。

○澁谷次長

そうですね。戻れる子であればあゆみルームの段階で学校に戻しています。

○谷垣教育長

今の話ですがまず卒業のことを言うと、去年も卒業証書を作ったんですが分教室になったので郡山中学の卒業証書が欲しいか「ASU」の卒業証書が欲しいかと聞くと、大概みんな「ASU」の卒業証書が欲しいと言ってましたね。それ以前も原籍校の卒業証書をもらいたいという子もいたことはありますがほとんど「ASU」の卒業証書が欲しいと。学科指導教室のころは「ASU」と原籍校とそれから担任が独自の卒業証書を作るという3枚の卒業証書があったわけなんですけれどもやはり「ASU」の卒業者に関しては…。次長が言った原籍校に戻るということは入る段階で子供らもあんまり考えてないと思うんですね。それから、理由の部分について私はもう9年目なんで、この職についてからずっと「ASU」を見てたんですけど、ちょっと変わってきてると思いますね。初めの頃は学習がよくできる子が結構いましたが、人間関係が無理だと。友達の間人間関係が無理でそれで学校にいけなくなっているが、勉強はしたいし、もちろん高校も行きたいから調査書のもらえる「ASU」に来ると。なので人間関係の理由が多かったんですね。今も人間関係のトラブルはありますけれども、どっちかっていうとコミュニケーション、さっきの人間関係というはトラブルがあったり、いじめの子もいましたけど、今の子はそれ以前のコミュニケーションがうまくとれない。これもすべてじゃないですけどトラブルもあまり起こらないというか、でも集団に入っていくのが適わない、いわゆる学校という、みんなで一緒に何かしようとかいうのがしんどくなる子が増えてきた。というのも全校集会なんかしても全校集会に並べない子がいるんですから。あの集団の中に入っていけない。でも、体育館の後ろの方で1人でやったら聞ける、そんな子が増えてきて、今の「ASU」の子たちもそういうことだと思います。8年前ぐらいならいろいろ聞いたら割としっかり答えてくれた。今の子はいろいろ聞いてもあんまりはっきりしない。ちょっとその辺が変わってきてるか。お答えできるところはそんな感じです。

○菊岡委員

「ASU」の卒業生の方々がその後どういうふうに育っていかれたかとかちょっと興味を持ったんですけど。

○澁谷次長

追跡調査はしてないんですけれども、自分たちで高校に行きたいと思って、高校にほとんどの子が行ってるんです。ただ、行ったもののやはりちょっと違ったなということで自ら受け直して、また別の学校に行ってる子もいます。中にはカウンセリングのようなお仕事につきたいとか教員になりたいとかいうことで頑張っている子もいると聞きます。私がびっく

りしたのが、高校に行って、高校の生徒会長をやった子がいたんです。たしか10周年の頃だったので10年ほど前だったと思うんですけども学校にも行かなかった、行けなかった子が、「ASU」の文化祭では堂々と初めて会う方々の前で司会とかをしながら、演じ切って、そういう子たちが自信を持って、次の高校では、生徒会長もやったっていう子もいます。卒業後引きこもってしまうというのは聞いてはいません。

○菊岡委員

「ASU」にも行けない子はどうなんでしょうかね。

○澁谷次長

「ASU」に来てる子が「ASU」に通えなくなったっていうのはあんまりないんですね。でも「ASU」に行くことすらできない200人のうちの180人ぐらいっていうのは、家から出れない子もいますし校内教育支援センターとか、別室でできる子もいますけれども実際、家の中でこもって自分の部屋から出れないお子さんもたくさんいます。担任は毎日のように連絡します。すると親御さんも毎日連絡に答えるんですけど、どんどん親御さんもしんどくられて、じゃあ家庭訪問に行ってそれで何らかのメッセージを伝えて、うまく何かのタイミングで家を出れるときもありますけれども、実は家から全然出れないまま卒業を迎えるっていうパターンも中にはあります。コロナの前後の不登校は、本当に大きく変わったと聞きます。コロナでもう無理しなくてもいいよ、学校に行かなくてもいいよって、あの頃からの不登校はちょっと違います。

○菊岡委員

それが一番増えた要因ですか。

○澁谷次長

そういう風にいろいろな人は見てるんですけど。

○谷垣教育長

コロナ以降本市の数字を見ても、コロナを経て増えてるこれは間違いない、基本的な傾向ですから。これだけじゃないんですけど。それはコロナが怖いからではなく、それもあるんですけど、3ヶ月の臨時休業というのがありました。そうするとその学校へ行くということに対して、あの時は選択肢ができてしまったんですね。もう1つはいじめの問題があっていじめられたときでもしんどかったら無理して学校に行かなくてもいいんだっていうのが随分広がりました。それはそうでしょう。行って嫌な思いをするくらいだったらもう逃げたらいいと、家へ逃げたらいいとそういう意味で学校へ無理していかない。嫌ならもう行かなくてもいい、いわゆる行かないという選択肢ができてしまったわけです。

それで翻って、我々自分らの時のこと考えて、この間校園長会でも皆どうでしたって聞いてるんですけど昔は学校へ行かないっていう選択肢があったのかどうか。昔はあんまりなかった。楽しいかどうかは別にして、嫌や今日もう行くのいらんわとか、今日宿題してないからもう行くのいらんわっていう日はあっても、一旦行かざるを得ないというかね、でもそれ、行きたくないけど、行かんでもええよって言ってくれる人がいなかったんです。今はそ

れがいるんですよね。そうするとそっちを選んでしまう。ここがやはり増えてきたと。だから単にコロナということでもなく、それがもちろんきっかけなんでしょうけど、今の子供達って選択肢が増えてきたことが、かえってしんどくなってる。学校行くのか行かないのかなんてことを選べるようになってしまったというところが、こういうことに繋がっているのかなと。だから逆にそうなったら学校行っていったい何の意味があるんやろうということを考えますよね。その中でさっきの総合プログラムではこれに関して、学校に行ったら勉強が分からないなら何をしにいったのか、要するに学力がちゃんとついてなかったら何をしにいったのか、6時間ほどの授業が苦痛でしかないようになる1日を過ごして、何をしに学校に行ってるのかと。だから中学校になってぐっと増えるということもあるんじゃないですか。だからやはりちゃんと小学校の頃に学力をつけるってことが大事なんですよって話をしてるんです。これは市長も仰ってましたし私も同じ事を言ったんですけど、まず勉強は嫌なもんやっていう、その既成概念を何とか取り除けないかなと。皆さん勉強は嫌でしたかね。

○上田市長

テストを辞めましょうか。

○谷垣教育長

だから極端な話、評価をするから嫌になっちゃうんでね。ただ、それをしなかったらしなかったでまたそれこそ高校入試はどうかとかなってくるんですけど。よくこれも言うけど幼稚園の子とか、小学校低学年の子を見てたら楽しそうなんです。そこで、いろんなこと知りたい、何でなのとか、どうしたら出来んのか色々聞いてくる。多分それをするのが喜びだから行くんだよ幼稚園自体に。もちろん来ない子もいますけども。どっからかなといつも思うんですけど、小学校の3年生4年生ぐらいが何か勉強が嫌になったりするのかな。それは人と比較されるようになってくる。できることとできないことが。あの子のほうができる。私はあれができない。比較が始まるのは、そのぐらいの年齢なのかなと。あとそういうことを比較じゃなくて、その子の中で伸びる部分を大事にしてあげればいいんだけど、どうしても学校というのは集団ですから、一律の中で、ちょうどテストしたら何点何点って、100点満点の子を見て自分はなんでできてなかったなんて。何か、学校が段々そういう感じでね、勉強が嫌になる。でも勉強をしろろって感じなので、家に帰ってもまず宿題しなさい、宿題してきたら遊んでいいからねって言うわけです。そうすると遊ぶことは楽しいけど勉強は苦痛なもんやと無意識に出てしまってる。だから、勉強楽しかったですかと聞いたらあんまり楽しいという人はいない。そうすると学校行くのも楽しくなくなるんじゃないかなと。学校楽しかったですか。

○菊岡委員

学年とかによって違いますけどね。楽しかったりとか、違う楽しみを見つけてそっちがあつてとか。苦痛ではなかったですけどね。

○谷垣教育長

それなら何が楽しかったですか。友達ですかね。我々はそういうことを考えなければなら
ないと思うんですよ。楽しかったとしたら何が楽しかったのか。それを今子供たちに与えら
れてるのかどうかをね。

○菊岡委員

これを問題と捉えるのか、ごくごく一部ですから個性ととらえるかですよね。こういう子
もそれはいて当たり前なのでこれを問題視するから何か変な方向にいつてしまうのでは。

○谷垣教育長

学校行かないっていうのは、個性ですかね。何か抱えているから行かないのではないかと。

○菊岡委員

集団のそういうことが苦手な子もそれは個性だと思うのでそういう子がいてもおかしく
ないわけですから。

○谷垣教育長

そういう子が増えてると考えたらね。

○菊岡委員

先ほどおっしゃったように、無理に学校へ行かないという選択肢は、今までなかったのが、
それもありだっというような価値感が生まれてきたので、今まで蓋されてたのがようやく
でてただけの話であって、昔から別にあった話で。

○谷垣教育長

これもこの間言ったけど、これは氷山の一角で、やはり予備軍とか、頑張って行ってる子
がやはりいるんですよ。ただそれが、もうそれで行かなくていいって言うてしまうともう
何か崩壊してしまうかも知れない。難しいなと思うんですね。

○岩田委員

学校行ってない子は家で何をしてるんですか。

○澁谷次長

1つはゲームですね。

○岩田委員

昔はそんなのがなかった。

○谷垣教育長

昼夜逆転してるらしいね。

○岩田委員

だから我々子供のときは、家でいてるよりも、学校行った方がいい、家でいても面白く
ないわけです。今は家でゲームに耽ったら何時間でも楽しめますから。その中でそのオンラ
インから友達とも話せるし交流できますから。

○澁谷次長

そうなんです。友達ができるんです。

○岩田委員

だから昔と今との友達のできる場が違うんです。

○澁谷次長

格好も気にしないでいい。

○岩田委員

昔は家から出ないと友達とは交流できなかった。

○谷垣教育長

学校よりも楽しい場所があるわけですね。

○岩田委員

でも、僕も勉強を楽しみに学校に行った記憶はないですけどね。はっきりいって。でも学校行ってましたからね。別に勉強みたいなものどっちでも良かった。それにテストもなかったと思いますよ。小学校の時テストなんてなかったですよ。なかったは違うかもしれないですけど。

○谷垣教育長

ただ勉強が楽しいとはなかなか皆は言わないんだけどやはり授業とかね。例えば楽しい授業とか。

○岩田委員

休み時間が楽しかった。休み時間で何して遊ぶかっていうのは楽しかった。

○上田市長

どんな社会でもそうだったけど皆勤に価値があった社会だった。皆勤賞にします、皆勤賞。僕らの時代はそうだったけどそれに価値がなくなった。という意味で言うと多様化を認めるというか、休んで海外行ったっていいみたいな。だってそれ認めないとスポーツで子供たち活躍できないような社会になっていくからね。

○岩田委員

学校への期待というか、そういうものは相対的には下がってるんでしょうね。勉強は塾に行って。小学校の高学年になったら塾に行って、そうなったら学校って何するところみたいなね。

○澁谷次長

悲しい。

○上田市長

特殊な世界だけど、この間の土曜日に大阪桐蔭学園のブラスバンド部が毎年1回ずつ来てくれて、音楽祭に合わせて来てくれてるんだけど2年前までは無料やったけども、お金をとらないといけないうてなって、2千円。今年は150人来てくれてる。もう監督さんは始めと終わりを言うだけで、もう後は適当にぶらぶらしながら振ってるだけ。もう全部生徒たちが、ミュージカルを挟んでやってる。年間160公演。プロ並みです。プロでもそんなやらないか。もう生き生きとしてね。それは特殊な世界かもしれないけど全部生徒たちにやらせて。

○岩田委員

1 軍 2 軍あるんですよね。

○上田市長

それはどうなってるんでしょう。全部で 180 人ぐらい。

○岩田委員

らしいですよ。甲子園応援は 2 軍らしいです。

○上田市長

練習ももうほとんどノータッチで、まあ専門家は呼んでるけど、全部自主練習でやってると。160 公演。もう 12 月入ったら連日クリスマスソング。

○谷垣教育長

それは学校なんですかね。そういう集団があってもいいとは思いますが、それこそ今は部活動に力を入れてますけど。そんなことは外の集団がやることで、学校の部活動がそれをする事なのかなと。いいのかなと思ひながら。

○上田市長

そうだけど、終わったら何人も中学生来てた。頑張れよ、頑張りますって言ってたあの姿を見てたらいいもんやなあと。

○谷垣教育長

スポーツの世界でもよくある、サッカーとかね。カリスマ的な監督で、そこへ全国から生徒が集まってくる。そんな子はサッカーができなくなったら学校も辞めていく。そういう 1 つになんか一生懸命になっている子はそこで生きていったらいいんですよね。そういうところが別にあったらいいということで。

○上田市長

もう 1 つ思うのは、子供からって大人の姿よく見えますよね。自分たちに勉強しろって言うけど、あなたは勉強してるのかと。ものすごくそう見えませんでしたか。それも反面教師でやるかもしれないけど、僕はそういうところはものすごくよく見えた。子供からはよく見えるんじゃないかな。そういう意味で、もう一回、教員も変わらないといけないのかなと思うんだけどね。旧態依然としたことをしても違うかとは思いますがね。この中には書いてないけど子供だけじゃなくて、実は免許返納ってちょっと我々考えないといけないんだけど、免許返納ってのはどんどん進めていくと、データがここに書いてるんだけど、不本意で免許返納した人の要介護率が 2.1 倍に跳ね上がる。つまり、ひきこもってしまう。外に出なくなる。この和田さんは 80 歳になっても免許は返納するなど。実際に生活できない人がいるわけでそういう人を無理やり、剥がしてはいけない。刷り込みもあるしな。高齢者の事故が多いというのもデータ上はそんなことないらしいです。80 代以上の事故はほとんど自損だけれども高齢者が事故起こしたらテレビで大きく取り上げるからね。ものすごいそのなんていうか事件としていじめとか、自死とか、それから、不登校も含めてそれでトラブったらもう本当の事件にしてみんな取り上げるから、だから宝塚でなんかあんなことがあ

って、マスコミが叩いているのは宝塚って会社だからね。会社ばかり叩くから会社も堪らないし、堪らないからそういうことにならないようにしようと、どんどんどんどん行く。今年の秋まつりでいつも模擬店作って、焼きそば屋やられてるところとかおにぎり屋とか、ものすごい規制が厳しくなって、もうおにぎりは出せないんだよね。おにぎりが駄目ならパックご飯を入れてという話になっても駄目。ドリップコーヒーはアウト、インスタントコーヒーだったらオッケーとかね。餅は絶対駄目とか。それぐらいいいじゃないですかって言ったら、じゃあ何かあったら責任取りますかと。だからもうそういう社会になってみんな責任逃れ、学校もそんなところはないですか。こんな地域がつぶれてしまう。何もできない。もうキッチンカー呼ぶかという話になる。

○谷垣教育長

責任はね、だから、学校は自分のところでよく決められないからみんな教育委員会から言ってくれという話になる。だから、学校の文化祭もできなくなるんじゃないかな。こんな状況だと模擬店なんてできない。中学校はあんまり模擬店はしてないかな。PTA がやるくらいで。それも厳しくなってるよね。高校は生徒もやってますけど、今おっしゃったように、ご飯ものはもう一切駄目です。焼きそばとかやったらオッケー。

○上田市長

ひどいね。何か起こったらってことばかり考えてる人がね。

○谷垣教育長

学校はやはりそうやって何か起こったときに、困るからある意味管理的になっちゃうんですよ。問題行動を起こす前になんとかみたいな感じでね。そうなるともうこれはいけない、あれはいけない、こういう恰好しなさい、と。それにやはり耐えられない子供がちょっとずつ増えてきている。総合プログラムに不必要な規制やルールに縛られない学校生活と書いてましたけどそういうことにやはり耐えられないことで学校へ行くことの意味を疑いだすんですよ。

○岩田委員

総合プログラムの概要で未然防止とか、いわゆる芽を摘むとか職員対応ではそういうことがよく言われると思いますがこういうので、事前に不登校が、このままいけば不登校になるけれども、何とかこれで食い止められたというようなそんな事例というのは認められたってというのはありますか。

○澁谷次長

先生達で情報共有をするので、例えば担任と合わなくても、他の先生と繋がったりとかいろいろあると思うんですが休みかけたときに、いろんな目があることによって、きちんと通えるようになったっていう事例はあります。そうやって色々やっても行けなくなったっていう子もいる。なので、スクールカウンセラーにももちろんかかる人もいますし、保護者自身が変わると子供が変わるっていう場合もあります。

○谷垣教育長

たぶん、不登校の定義がね、年間 30 日以上欠席になってるわけですよ。それ以前にも、休みだした時に手だてをしたりして、出て来られるようになりましたという話はよく聞きます。

○岩田委員

だから、そういうのをこっちはプラスに考えれば良いのではと思います。だから頑張って防いでおられるのもあるんですよ。

○澁谷次長

そうですね。そういう意味では、タブレットとかとっても役に立って休みかけたときに教育の様子を、授業の様子を配信する。ちょっと何となく教室の空気感が感じられたら行ってみるという子も実は何人もいますし休み時間そのまま置いといたら、起きてるかとかいう声をかけたりとかそういうことはやってます。

○谷垣教育長

年度変わったら出てくるようになりましたとかね。

○岩田委員

だからその辺でのせめぎ合いで上手くこう、食い止めていただいている部分もあるんですよ。

○谷垣教育長

不思議なことに行事とかなら出てくるんですよ。修学旅行とか。体育大会とか。

○上田市長

それは楽しいからだろうね。

○谷垣教育長

だからそういう意味では友達の間関係で来れないんじゃないんですよ。それが嫌なら行事も出て来ないから。やはり勉強が嫌なんだろう。授業が嫌とか。

○澁谷次長

座っているのが面倒とか。

○大原委員

大体これって何歳ぐらいから登校拒否になってるんですか。入学してすぐとかは登校拒否はないでしょう。

○澁谷次長

減多にないですけど。いることはいます。

○大原委員

まあ兄弟とかそのお兄ちゃんとかお姉ちゃんとかがしている場合はおいといて。

○澁谷次長

大概是 4 年生、5 年生で辺りでそうなる子が。

○大原委員

ちょっと勉強が難しくなってということですか。

○澁谷次長

分数が入ってくる頃とか。

○谷垣教育長

最近で気になっているのはうちではないんですけど、保護者が全くノータッチというケース。それは低学年から学校に行く習慣がつかない。もう、放置というか放任ですね。自分は仕事行って子供がどうしてるかは知らないという親もいる。もちろんレアケースですけどね。普通は行きなさいって言ったら行くんですけど、それも行かなくなるのがたしかに3、4年ぐらいかな。

○澁谷次長

知恵がついてくる頃ですね。それでも小学校はまだ少ないんですけどね。ただその頃にそういう面があって中学校に行って一気に、まあ思春期という年齢的なこともありますけどね。

○大原委員

その年齢はターゲットですよ。そのときに不登校にならないようにいかにこうね、ちょっと勉強も楽しいよっていう、楽しくはないんですけど。個人でできないことをやはり集団でできるっていう楽しさってのを、もう少し分かるようなかたちの指導法じゃないですけど。一緒にしたら、三人寄れば文殊の知恵で、1人じゃ分からなくても、お友達3人4人5人いてたら、なんかいろんな意見を出して分かったわってというのが、きっかけにもなると思うので、そのあたりもできたらいいですよ。

○澁谷次長

そうですね、参加して居場所ができたらね。

○大原委員

その辺がライン的なところかなと思いますね。

○澁谷次長

人数が少ない学校が割と不登校が多い気がするんです。クラス分けで雰囲気を変えることができなかったり、集団が固定されてて小学校から同じメンバーのままずっとでっていう子供が割とこれまでの不登校は多いかなと思います。小学校で行きにくくても中学校に入ったときに2、3集まったら、また違う友達ができたり。

○岩田委員

私は高校の現場にいたから、中学校の欠席日数とかもあがってくるんです。ほとんど行っていないのに高校になったら来れるとかね。そういうのがやはりあるんですよ。

○澁谷次長

知らない人だったらと。過去の自分が分からないことだとか。やはり変わりたいって思ってるんですよ。

○上田市長

僕の知ってる子はもう30代後半になってるけど小学校、中学校は1日も行っていない。そ

れで両親と仲が良かったからいろいろ学校探して箕面自由学園とか探して、でも、最後に彼女が生き返ったのが関西文化芸術高校だった。そこで息を吹き返したというか。あそこは芸術関係が多いですからね。演劇とか技術とか音楽とかね。そういう中で、本当にみんなびっくりしましたけど生き生きとしてた。

○谷垣教育長

今度、講演があるんですけど吉藤さんの。おりひめロボット。あれを作ったのも奈良県の人だけどあの人も小学校はずっと不登校。家で折り紙ばかりしてたんですって。それで今そのロボットにおりひめと名前を付けてね。自分の名前も吉藤オリィっていう名前にしてるみたいなんですけど、それが中学校はちょっと行っていたそうなんですけど最後王寺工業へ行ってそこでそういった機械を作ることが楽しくなって、電動式の車いすとかを作っ
てそれからそのロボットを作ったと。自分が不登校だったときに 1 人での孤独を和らげるものをなんか作りたいっていうので、あのおりひめというのは、教室に置いて、そのロボットが代わりに今日の授業風景を見たり、或いはその声、自分が発言者をしたければ発言できるようにそれを作ったと。それが今は学校ではなくて医療用として、ALS の患者にも使えるというようになっている。そのロボットが例えばコンサートに行くと、座席に置いておいたらそれで動けない人でも一緒に楽しめるということで、それを作ったのも不登校の経験からということです。お父さんが中学校の校長先生で砂間君もそうですけど、そういう経験がどっかに生きてくるということはあるんだろうと思います。そういう意味ではそれが個性であって、全ての子に出てこい出てこいと言わなくてもそれが逆に生きてくるということがあるのかもしれない、というぐらいで考えてあげてもいいかもしれないですね。これだけ数がどんどん増えてくるとやはり教育委員会としてほっとけないということになって、増えてもいいですとは言えないですね。

○上田市長

この間 70 周年の記念でオレンジランプという映画の上映会があったんですがご覧になった方おられますか。この間小ホールであって、ものすごい良かったんだけど、オレンジはアルツハイマー、認知症のシンボルカラーで、オレンジランプは実話なんですけど 39 歳で若年性アルツハイマー型認知症って認定された人の物語です。この人もこの映画の作成に関わっていて今は 47、8 歳になる。最初はもう家族と苦しみ抜くわけです。自動車の販売会社に勤めてみたいんですけど、もう大変だったみたいで。でも、変わるきっかけになったのが実は体験談を直接聞くこと。郡山でも今、認知症カフェっていう体験談を聞きながら勉強しようというところがあってそれが今 14 ヶ所も展開され、それが立ち直っていくきっかけになったと。そのきっかけが何かというと、認知症の先輩がいるわけですね。その人たちがみんな朗らかに話して、自分のこと認知症と認めながら、要するにできないことを嘆くのではなくて、できないことは助け合いながらできることをチャレンジしようということが基本的な考え方で目覚めていくわけですね。今、相談を受ける側でこの 39 歳の人
が 47 歳になって、活躍しておられる。認知症という病気は無いんですよ。原因はちゃんとアルツハイ

マーとか色々あるんだけど、認知症という言葉が非常に差別的になって、少し物忘れしたらあの人は認知が入ったみたいな言い方をしてそうじゃないんですよ。何でも助け合いながら生きていける症状であって原因の要因をちゃんと追求して、ケアをしていかないといけないということを映画の中で言ってます。その認知症カフェみたいなものを不登校の子にもできないかなと思って。うちのスポーツ大使の砂間君だってあの子も小中はほとんど行ってない。それがオリンピックの選手になっているということもあるしね。ただ、これはさっきもちょっと話したけど、やはり自分の体験から顔と顔を突き合わせて話をすることが大事だということを改めて言っていた。

○谷垣教育長

生徒本人たちがどうというより保護者も苦しんでるんですよ。

○上田市長

保護者に対してでも良いかもしれないな。

○谷垣教育長

そのような人が集まるマザーリーフの会というものがあるんですが、そこではそういう体験の話を聞いたりしています。

○上田市長

それは大事なことだと思う。認知症のそのカフェの一番もとになった、もう早くから始めていた会があって、にどわらしの会という会です。にどわらしのわらしというのは子供という意味でつまり認知症も昔は痴呆症と言ったけど子供に返るだけという話ではないのかということです。それの何が悪いのかという話ですよ。そういうことも広げたらいいのかなと。保護者の相談という点で。

○谷垣教育長

「ASU」で卒業式に来てもらって話をしてもらおうようにしたり、砂間君は一度来てもらったかな。「ASU」で話をしてもらった。その卒業生が話をするような機会を作ってもいいかもしれないね。「ASU」のほうはそれなりにやってるからね。「ASU」に来ない子をどうするかというところでそんな機会を作ってもそんなところにいけるならそもそもということですよね。

○上田市長

認知症とかでしたらもう今、オレンジのリストバンドを目印にして要するにサポーターに、認知症サポーター。どういう風に声をかければ良いのかとかいうことを勉強して応援するということは随分広がってる。それこそ社会に認知してもらわないといけないので。だから、不登校も同じように社会に認知してもらわないといけないのではないかなと思う。だからもっと大っぴらに支えろと。頭の中に、我々も含めて先生もどこかにあるんじゃないかな。不登校の子は困った子だとか、どこか問題があるんじゃないかなとか家庭に問題があるんじゃないかなとか何かをどっかに思っていないかな。

○谷垣教育長

自分たちは苦しんでるからね。平気で学校行ってない子ってあんまりいない。そうだけどやはり、例えば親に迷惑かけてるとかは感じてますよね。親に心配かけて、「ASU」の場合の卒業式を見てるとそういうことを必ず言いますから。でも行けない。分かってるんだけど、行けない。「ASU」では話できるんだけどそこにも来れない子にそんな場は無いのかなと。自分でもよく分かってない子もいてる。それを、そういう子もいて個性やと思っけていてもそのままにしておくとうどうしても勉強はできなくなるし、そのまま中学校でも、結局社会にも出れなくなってしまうのもかわいそうだと思う。不登校のままひきこもってしまっけて、もう30、40歳になっけてるっていうケースもないこともない。どっかで社会へ出て行くきっかけを作れたらなと思っけて、それが小学校中学校でないといけないうわけではないと思っけてうけどね。砂間君も言っけていたけど出会いなんでしょうね。やはり人とどう出会うのか。そう言っけてるだけでは駄目なんでしょうけどね。

○岩田委員

先ほど教育長が言っけていたマザーリーフの会というのは全国的なものですか。

○澁谷次長

郡山で「ASU」の卒業生の保護者が立ち上げられています。

○岩田委員

それは認知されてないんですかね、不登校の子の親たちには。

○澁谷次長

それはよくチラシとかも配っけておいてます。

○谷垣教育長

年に1回ぐらいだけ講演会をやっけてそれを宣伝したりしています。

○澁谷次長

三の丸会館でやっけています。

○岩田委員

どんな参加なんでしょうね。

○澁谷次長

その方達が今度カフェを開くということが新聞にも載っけてたと思っけています。不登校の子の親御さんにいろんな話を聞こうと言っけているそういうものを見ました。

○岩田委員

そういう繋がりができるとうやはりまた変わっけてくるんじゃないかと思っけていますね。

○澁谷次長

親御さんも本当にしんどいので。

○岩田委員

それで繋がりたいうことですよな。

○澁谷次長

カウンセラーにかかられても合う場合と合わない場合があるし、人にもよるし、自分のタ

イミングにもよるので、親御さん同士が一番いいのかなと思います。

○谷垣教育長

いわゆる登校刺激の与えるタイミングっていうのはやはり難しいですね。一時はあまり学校行きなさいとか頑張れと言っではいけないという話もあったり、そういうことは言わないほうが良いみたいな、それが広がりすぎるとすぐ面倒を見ないで放置するみたいになってしまう。だからこういうタイミングで学校行ってみたらとかいう、そんなことはその会とかに行ったらある程度経験談で教えてもらえる。登校刺激は先生でも難しいよね。あんまり刺激をしてはいけないといって全く連絡を取らなくなる人がある。そうなるともう自分は忘れられてるなと思うことになる。

○澁谷次長

そんなに来ないでと言われたことを鵜呑みにして行かなかったら、何で来てくれないのってことになるし、休みかけたときのその担任の先生とお家との関係は本当に難しいですね。それで大変なことによくなります。

○上田市長

みんな怖いんだろうと思う。それはやはり正しい知識とか必要なのではないかと。認知症にも言えることだけれど、不登校にも何かそういう知っておくべきことはあって、そのようなことはやはり勉強しないといけないと思う。

○谷垣教育長

初めに紹介してくれた「ASU」の15周年で作ったガイドブックにはそういうことも書いてあります。それも全教職員に配ったんですけどどうもあんまり読まれていない気がするんです。カウンセラーを増やしていただいて、各学校に今何時間ぐらいいるのかな。

○澁谷次長

月に2〜3回は入ってます。

○谷垣教育長

それも何ヶ月も先まで予約が入ってて、なかなか対応しきれない状況。そういう人に、ある意味専門的なノウハウを持ってる人にはいってもらったらいいんでしょうけど。

○澁谷次長

でも、先生方もそのスクールカウンセラーの人から研修を受けて、傾聴するというか、聞くっていうことを学ぶ研修はよくしています。ついつい教員って言いたくなっちゃうので、聞くとか聞くとかそんな研修はよくしています。

○谷垣教育長

カウンセラーを増やせると嬉しいんですけどね。でも、外国だとそういうカウンセラーが学校に常駐してる。そういう部屋もあってというのも結構あるんですけど。日本はなかなかそこがね。

○澁谷次長

今回の校内教育支援センターでそういう形で作っていただいているので写真にもあるよう

に、ソファを置いたり、ぬいぐるみを置いたりほっとする気軽に入れる空間を少し離れたところに作ってあるんです。普通の学級から見えないところで来たくなったときに入ってという教室はあります。

○谷垣教育長

専門性のある先生が話を聞いてくれるけどそれが嫌みたいですね。教員は皆カウンセリングマインドを持ってないといけないけど。

○上田市長

異世代交流とか若い人だけじゃなくて高齢者との交流とかそういう機会はあまりないのかな。そういうのも刺激になると思うし、今はそういう人たちのほうが元気だったりするしね。

○谷垣教育長

幼稚園は高齢の方に来てもらって昔の遊びを教えてもらうようなこともしてますけど小学校中学校はなかなかない。いやでも、そういう学習だったらありますね。

○澁谷次長

畑させてもらったり、昔の遊びっていう形で竹とんぼを作ったり色々してますね。

○谷垣教育長

でも、年に1回くらいのことですね。

○澁谷次長

平和小学校はいつでも地域の方が来れる部屋を作っていただいているのでいろいろ声掛けしてもらっていい感じみたいですけどね。

○谷垣教育長

今のようなことを参考にしてまた不登校対策総合プログラムもこれから考えようと思っていますので。この辺を骨子にしながらこういうことも入れてはどうかとかあれば教えていただければと思います。

○上田市長

この本でも生きがいは求めない、生きているうちに楽しみは見つかる。それが結論なんだけど、よく中学校だったら夢を見つけようとか書いてあるけど、大人がどんな夢があるかっていうのは示さず夢を見つけようとか夢を大事にというけど、選択肢はいっぱいあるということを伝えないといけないと思うけどなあ。世の中の現実の姿に対してその選択肢が狭くなってるのも事実じゃないかと思う。それこそアスリートもそうだし、音楽もそうだしそんなことも含めてこんな面白いことがあるんだよっていうことを、学校では伝えてるのかな。勉強したら何になるっていうことを。

○谷垣教育長

夢をもとうということはよく言うけどそれができないから苦しむ子もいてるし、夢をもてないというのは、例えば仕事を書きましょうといってもそれが見つからない。そんなものないって答える。

○上田市長

この社会を支えてるいろんな人達がいる。そういう社会だっていうことが伝わってないんじゃないかな。

○谷垣教育長

好きなことから始めれば良いって言うんですけど、好きなことって言ったら Youtuber になりたいとかゲームプログラマーになりたいとかいう話になっていく。もちろんそんなものだけではないんだけどさっきの話のように、まず学校に行ってるということ、意義が分からなくても行ってるうちに楽しいことがあるかも分からないということがいいのかなとも思います。

○辻井次長

いろいろご意見をいただきましてありがとうございました。参考にさせていただきます。ありがとうございます。これをもちまして、総合教育会議を終了させていただきたいと思えます。本日はどうもありがとうございました。

以上